

カント Kant, Immanuel 1724 ~ 1804

ドイツの哲学者。近世までの西洋哲学の流れを総括するとともに、近代思想に決定的な影響を与えた思想史上の分水嶺的存在。

東プロイセンのケーニヒスベルク(現ロシア領カリーニングラード)に生まれる。ケーニヒスベルク大学に学び、後に同大学の私講師・教授を長く勤め、一生をこの地で送った。カントは早くから多くの哲学や科学の著作を出版していたが、1781年57歳にして成った大著『純粋理性批判』は大きな反響を呼び、その名を一躍高からしめた。認識を論じたこの著作に続き、道徳・倫理について『実践理性批判』(1788)を、さらに美学を扱った『判断力批判』(1790)を著し、精密で広範な批判哲学を完成した。

カントはルター派の敬虔主義の影響下に育ち、その道徳観はきわめて厳格であるが、一方でニュートン力学などの科学に精通し、人間の自律と自由を尊重する啓蒙主義的思想家でもあった。彼が日課とする散歩の時刻があまりに正確なので町の人にはそれに合わせて時計の針を修正するほどだったが、ルソーの『エミール』を読んだときは熱中のあまり散歩を数日間中止したという逸話は、その人物像をよく表している。

Great Books 31 純粋理性批判(Kritik der reinen Vernunft)

古代ギリシア以来、西洋の哲学は、人間が感覚的に経験できる個々の事象を超えた、世界の根源的・究極的なあり方についての認識を追求してきた。この分野は形而上学と呼ばれ、主たるテーマは、神の存在や靈魂の不滅などを扱ったものであった。しかし、近代になり経験に基礎を置く自然科学が興隆すると、はたして形而上学が学問として成立可能か否かが問われるようになった。この問題に対してカントが試みた思索と回答が『純粋理性批判』である。

カントは、ヒュームの影響下に従来の形而上学を独断論としてしりぞけ、独自の批判的方法で人間の認識能力を厳密に考察した。形而上学の認識は、感覚を通じた経験によるのではなく、経験とは無関係な(純粋な)認識能力(理性)によって担われるので、これを詳しく吟味(批判)しようとしたのである。

その論考は長大なものであるが、思いきって要約すれば、われわれが絶対的に確実な認識に到達できるのは、外部の事象をわれわれが先天的(ア・プリオリ、後で獲得したのではない)にもっている形式(空間・時間)と概念(たとえば因果性)で判断するからであるとし、人間の認識能力において主観的な觀念の働きを優位に置くものであった。これによってカントはヒュームの懐疑論を克服し、認識の確実性を論証したのである。しかしその一方で、われわれは常に感覚を通じてしか外部の事象を受け取れないので、理性が扱えるものは外部の**物自体**(Ding an sich)ではなくあくまで現象(Erscheinung)にすぎない。したがって、神や靈魂などの経験不可能なものを対象とするとき、理性はつねに解決不可能な二律背反に陥ってしまう。よってカントは、形而上学を結局不可能なものであるとした。このようにしてカントは認識論の分野では理性の能力と限界を指摘したが、次の『実践理性批判』においては、物自体の世界の意義が人間の道徳性の基盤としてあらためて強調されることになる。

Key Word 物自体(Ding an sich)

空間と時間とは、感性的直観の形式にすぎない、それだからまた現象としての物の存在を成立せしめる条件にはかならない、また我々の悟性概念に対応する直観が与えられ得ないとすれば、我々はいかなる悟性概念ももち得ないし、従ってまた物を認識するに必要な要素の一つももたないことになる、[略]つまり我々が認識し得るのは、物自体としての対象ではなくて、感性的直観の対象としての物 換言すれば、現象としての物だけである。 < 篠田英雄(訳)『純粋理性批判 上(岩波文庫)』第2版序文 岩波書店 >

[人間の]意志は、なるほど現象においては自然法則に必然的に従うものとして、その限りにおいては自由でないと考えられるが、しかしまた他方では、物自体に属するものとして、自然法則に従うものではないから従ってまた自由であると考えられるのである。

< 篠田英雄(訳)『純粋理性批判 上(岩波文庫)』p41 - 42 岩波書店 >

(悟性概念)

人間が先天的にもっている思考の形式のことで、カテゴリーともいわれる。感覚を通じて得た対象を、12の悟性概念で判断することにより認識が成立する。

(意志の自由)

「神の存在」、「靈魂の不滅」と並ぶ形而上学のテーマ。物自体の領域でのみ可能とされる。

◆ *Great Books* 文献案内

- 📖 カント全集 第4～6巻 純粹理性批判 上・中・下 / 原佑(訳)
理想社 1966～1973年刊 <134.2/9/4～6>
- 📖 純粹理性批判 上・中・下(岩波文庫) / 篠田英雄(訳)
岩波書店 1961～1962年刊 <134/カ/1～3>
- 📖 世界大思想全集 哲学・文芸思想篇 10 上・下 純粹理性批判 上・下 / 梶田啓三郎, 高峯一愚(共訳)
河出書房新社 1956年刊 <080/3/1-10-1～2> 資料番号 10134211, 10134229
- 📖 カント著作集 第1～2巻 純粹理性批判 上・下 / 天野貞祐(訳)
岩波書店 1921～1931年刊 <134.2/1/1～2> 常置 資料番号 10213502, 10213510
* 『天野貞祐全集』第8～9巻(栗田出版会 1971～72)にも収録 <121.9/78/8～9>

◆ 理解を深めるために 参考文献案内

- 📖 カント『純粹理性批判』入門(講談社選書メチエ) / 黒崎政男(著)
講談社 2000年刊 208p <134.2JJ/134> 資料番号 21300892
- 📖 カント全集 全22巻・別巻1(刊行中) / 坂部恵(ほか編)
岩波書店 1999年～ <134.2LL/137>
- 📖 カント『純粹理性批判』の再検討 / 香川豊(著)
九州大学出版会 1998年刊 303p <134.2HH/128> 資料番号 21123708
- 📖 カント事典 / 石川文康(ほか編)
弘文堂 1997年刊 701p <134.2/126> 常置(相談室) 資料番号 21011671
- 📖 カント入門講義(叢書・ユニベルシタス) / ハンス・ミヒャエル・バウムガルトナー(著) 有福孝岳(監訳)
法政大学出版局 1994年刊 172, 20p <134.2CC/121> 資料番号 20704615
- 📖 イマヌエル・カント(叢書・ユニベルシタス) / オットフリート・ヘッフエ(著) 藪木栄夫(訳)
法政大学出版局 1991年刊 334, 30p <134.2Z/106> 資料番号 20300000
- 📖 カント純粹理性批判の研究 / 牧野英二(著)
法政大学出版局 1989年刊 305, 13p <134.2Y/101> 資料番号 20172474
- 📖 カント読本 / 浜田義文(編)
法政大学出版局 1989年刊 396, 3p <134.2X/45> 資料番号 20102034
- 📖 意味の限界 / P. F. ストロ-ソン(著) 熊谷直男(ほか訳)
勁草書房 1987年刊 367, 4p <134.2W/43> 資料番号 12304812
- 📖 カント(口口口伝記叢書) / U. シュルツ(著) 坂部恵(訳)
理想社 1982年刊 190, 5p <134.2/31> 資料番号 12304697
- 📖 人類の知的遺産 43 カント / 坂部恵(著)
講談社 1979年刊 386, 7p <280.8K/13/43> 資料番号 10497477
- 📖 カント純粹理性批判入門 / 高峰一愚(著)
論創社 1979年刊 499, 11p <134.2L/20> 資料番号 10214021
- 📖 カント全集 全18巻 / 高坂正顕, 金子武蔵(監修) 原佑(編集)
理想社 1965～88年刊 <134.2/9>